

江戸時代

翻訳日本語辞典

杉本つとむ編

早稲田大学出版部

江戸時代
翻訳日本語辞典

杉本つとむ編

早稲田大学出版部

編者紹介

杉本つとむ（1927～）
文学博士（東北大）
早稲田大学文学部卒
現在 早稲田大学文学部教授

著訳書

近代日本語の新研究（桜楓社，1967）
医 戒（社会思想社，1972）
蘭学事始（社会思想社，1974）
和蘭字彙（早大出版部，1974）
蘭語学とその周辺（桜楓社，1980）
外国語と日本語（桜楓社，1980）
ほか

昭和56年4月30日発行

江戸時代 翻訳日本語辞典

定価 25,000円



早稲田大学出版部

編者 © 杉本つとむ

発行者 城下幸雄

印刷者 安信印刷工業(株)

発行所

東京都新宿区
戸塚町1の103
郵便番号 160

早稲田大学出版部

振替口座 東京 3-1123
電話 東京 (203) 1551

3081-3296-9314

製本・牧製本



堀達之助肖像（重久篤太郎『近世英学史』より）

魯国留学生，市川文吉宛，堀達之助
の蘭文手紙〔一部省略〕（山岸光宣編
『幕末洋学者欧文集』より）

Ik vat hier een pen en mijn eie
hand, om uwe gelukkige reis naar Rus-
land te wenschen en daarbij mijn ge-
welen u te bezighen:

Tot het beoefenen van alle takken
der Europeesche wetenschappen en kunsten
grouzig; en tot het voortplanten daar,
van meer en meer beoefening in ons
Japansche rijk, zijde er eenige leerlingen
te zenden, en nu u naar Rusland
met dezelfde onderneming

op Den 24^{de} van met Aobang
de complimentair. Horikoshi
vijfde maand in 1869.

Sir Ichikawa Boonkichi being
appointed to go into Russia in order
to learn the science, and his friends
being grieved to be compelled being
separated from him, they have assem-
bled in Matsumotoya at Citaya to
forget the grief on drinking a wine.
In the banquet a man offering a cup
to his presence has said: "your busi-
ness must be careful, industrious and
continent, which will make celebra-
ted our country, but not be imprudent,
idle and lustful, which will become
the spots of our country."

fifth month of first year of
the Meiji Era.

Horikoshi Kamenofke.

同上，堀越亀之助の英文手紙（同上）

A
POCKET DICTIONARY
OF THE

ENGLISH AND JAPANESE LANGUAGE.

英和對照珍袖辭書



PRINTED

AT YEDO, 1862.

文久二年江戸開板

439.31 - P58/pn2 - C.2

NEW POCKET DICTIONARY

ENGLISH AND DUTCH LANGUAGES,

REMODELLED AND CORRECTED FROM THE

BEST AUTHORITIES,

H. PICARD.

PART I.

Eng.-Dutch.

SECOND EDITION, REVISED AND AUGMENTED

BY

A. B. MAATJES.

ZALT-BOMMEY

PRINTED BY AND FOR JOHN WOMAN & SON.

1857.

『英和对訳袖珍辞書』の原本,

H. Picard: "New Pocket Dictionary
of the English and Dutch Languages"
(初版), タイトルページ (国立国会図
書館蔵, 旧蕃所調所)

A

NEW POCKET DICTIONARY

OF THE

ENGLISH AND DUTCH LANGUAGES.

PART. I.

ENGLISH AND DUTCH.

ABB

Abb, *so, art. een, ene; so much a week, 200 veel 's weeks; so much a head, 200 veel de man.*
A. B. (verk. voor Arisium Baccalaureus) kandidaat in de letteren, m.
Aback, *ado, terug, achter.*
Abactor, *s. vreesdief, m.*
Abacus, *s. rekestafel, f. dekstuk van 't kapiteel ener zuil, n.*
Abailt, *ado, achter.*
Abalance, *s. buitging, f.*
Abalienate -ed -ing, *vervreemden.*
Abalienation, *s. vervreemding, f.*
Abandon -ed -ing, *overgeven, overlaten, ter proot geven, verlaten, versaken, opgeven, laten verren. To abandon one's self to, zich overgeven aan.*
Abandoned, *adj. overgegeven, verlaten, bedorven, smood, vercorpen.*
Abandoner, *s. verlater, m.*
Abandoning, *s. verlaten, f.*
Abandonment, *s. verlatenheid, verlaten, f.*
Abannition, *s. verbanning, f.*
Abarticulation, *s. geleiding, f.*
Abasce -ed -ing, *vernederen.*
Abasement, *s. vernedering, f.*
Abash -ed -ing, *beschamen, in verlegenheid brengen.*
Abashment, *s. verlegenheid, f.*
Abate -ed -ing, *vermindern.*
Abatement, *s. vermindering, f.*
Abate, *s. verminderaar, m.*
Abature, *s. spoor, n.*
Abb, *s. scherping, f.*
Abbey, *s. voersdighheid, f. regten van een' abt, n. pl.*

ABG

Abbeys, *s. abdis, f.*
Abbey-lubber, *s. lediglopende monnik, m.*
Abbot, *f. abt, m.*
Abbotship, *s. waardigheid van een' abt, f.*
Abbevoir, *s. weid, n. veng, f.*
Abbreviate -ed -ing, *verkorten.*
Abbreviation, *s. verkorting, f.*
Abbreviator, *s. verkorter, m.*
Abbreviature, *s. verkorting, f.*
Abdicare -ed -ing, *afstand doen, nederleggen.*
Abdication, *s. vrijwillige afstand, m. nederlegging, f.*
Abdicative, *adj. afstand veroorzakend of inhoudend.*
Abditive, *adj. verbergend.*
Abdomen, *s. onderbuik, m.*
Abdominal, -nous, *adj. tot den onderbuik behoorende, dikbuikig.*
Abduce -ed -ing, *afleiden, afvoeren, afwenden.*
Abduction, *s. afvoering, afwendend, f.*
Abductor, *s. afwendende spier, f.*
Abecedary, *adj. tot het abt behoorende.*
Abend, *adv. te bed.*
Aberrance, *s. afwaking, f.*
Aberrant, *adj. afwakkend.*
Aberration, *s. afwaking, f.*
Abet -ed -ing, *aanzetten, opstoken, opsteken.*
Abetment, *s. aanzetting, opsteking, f.*
Abettor, *s. aanzetter, opstoker, opsteker, m.*
Abeyance, *(lands in), s. verlaten, onbeteelde landen, n. pl.*
Abgregate -ed -ing, *afzonderen.*

ABL

Abhor -ed -ing, *verfoeien.*
Abhorred, *adj. verfoeid.*
Abhorrence, *s. afschuw, m. afgrijsen, n.*
Abhorrent, *adj. met afgrijsen vervuld; (to), onbestaanbaar met.*
Abhorret, *s. verfoeier, m.*
Abide, *aboden, abiding, wonen, verlossen, verblijven, volharder, zich houden aan, verdragen, dragen, verzuimloos zijn voor.*
Abider, *s. bewoner, m.*
Abiding, *s. verblijf, n. duurzaamheid, f.*
Ability, *s. magt, behzaamheid, f. vermogen, n. geldelijke middelen, n. pl.*
Abintestate, *adj. sonder testament.*
Abject, *adj. laag, versachtelijk, versoorpen; -, s. versachtelijk mensch, n. lage ziel, f.*
Abject -ed -ing, *veroorpen, versachten.*
Abjection, *s. laagheid, niste-coordigheid, f.*
Abjection, Abjection, *s. versachtelijkheid, laagheid, vuigheid, versoorpenheid, f.*
Abjectly, *adv. versachtelijk, op eenen lage wijze.*
Abjigate -ed -ing, *het juk afnemen.*
Abjuration, *s. afzwering, f.*
Abjure -ed -ing, *afzworen, verzoeken, bij eden herroepen.*
Abjuration, *s. wijzen van enting, f.*
Abjuration -ed -ing, *de woorden ontbloeden.*
Abjuration, *s. ontbloeding, f.*
Abjuration, *s. wegneming, f.*
Abjuration, *s. and s. abjuration, m. ucnemen.*

同上書, 本文第1ページ

序

南宗の普潤大師法雲は『翻訳名義集』(1157)で<夫レ翻訳トハ梵天之語ヲ翻シテ、
転ジテ漢地之言ト成スナリ、音ハ別ルニ似タリト雖モ、義ハ則チ大同>(原文は漢文)
とのべる。翻訳の名義はこのとおりであろう。梵天之語とはインドのサンスクリット
であるが、身近な例をいえば、『法華経』がある。原典を Saddharmapuṇḍarika とい
う。3語の合成語である。まず、Saddharma は Sad と dharma に分けられ、前者
は存在するの原義から<正しい・勝れた>の意をもち、後者は<法・教え>の意であ
る。puṇḍarika は<白蓮>である。したがってサンスクリットの文法によれば——多
く比喩を駆使する表現法も勘案して——Saddharmapuṇḍarika は、<白蓮のごとく正
しい法>とでも訳すのが正当である。しかし、西晋の竺法護は<正法華>と訳し、姚
秦の鳩摩羅什は<妙法蓮華>と訳した。日本人は、この鳩摩羅什の翻訳を珍重して、
『妙法蓮華経』、略して『法華経』と呼ぶ。

江戸時代の翻訳は鳩摩羅什の方式を学んだという。<蓮華の妙法経>とはしない。
確かに翻訳とはAの言語とBの言語とを置換することであるが、原義のままに、翻義
を示すわけではない。そこに解釈——理解と解説作業がおこなわれる——まったく言
語形式の異なる二つのことばが、形式と内容において、完全対応がないのみでなく、
実は法雲のいう内容の大同小異が問題である。しかも自国語でいかに的確にあらわす
かは、重要な作業である。その方法が、翻訳文化という一つの新しいジャンルを生み
だす。したがって、訳者はただことばの形骸を追ってはいは、誤解ないし曲解をもっ
て、翻訳することとなる。日本人、もっと厳密に言えば、幕末の英語学者堀達之助
は、英語の Love を<財宝>と訳している。一見唐突である。しかし、日本がはじめて
ヨーロッパ文化と接したキリシタン文化の受容にあたって、ポルトガル語の<amor,
s.m.>を<大切・懇切>と訳した。amor は love で置換される。<大切>の重さは
西欧の精神文化を神への祈りと実体験から了得した日本人の理解の結晶である。堀が
<財宝>と訳した真意もこの伝統に立つ。私見では、江戸時代の日本人の翻訳態度や
方法はきわめて高いレベルであったと評価できると思う。<越歴>と訳して<電気>
とは訳さず、<ナチュール>と音訳して<自然>とは訳さなかった。原語のもつ言語
的・文化的脈絡を大事にして、丁寧に訳すのである。もっとも、とんでもない誤訳も
ある。また大勢としては、訳語の供給は近世シナ語、あるいは古典シナ語に求めて忠
実である。一面で翻訳の本意はそこにあった。

オランダ語の衰退は英学の隆盛を予見させた。19世紀にはいると、長崎通詞に幕府
は英語学習研究を命じ、通詞らはそれに答えて、『諳厄利亜語林大成』の大著を編集
した。しかし時代ははまだ英学を選ぶには、はやすぎ、熟するにさらに半世紀の歳月
を必要とした。その間、世界の情勢と日本の国際的地位に常に関心をもって、政治・
文化の方向を見守った幕閣の賢者は存在したのである。されば歴史はこれを明白に刻
んで後世に伝えている。——そのもっとも輝しく、充実した言語文化史上の記念碑の

一つが、『英和对訳袖珍辞書』である。文久2年(1862)刊行であるから、明治維新を目前に、わずか6年前であった。起稿から換算すれば、今年がちょうど120年目になる。中心人物は堀達之助といい、長崎通詞の名門の一つ、堀家に養嗣となった俊才である。しかも彼に協力した人びとは20歳前後の若い日本人たちであった。いわば本書は日本がこれから先進ヨーロッパ諸国に仲間入りするための必死の書、青春の書といっても過言ではない。同書は単に英語に日本語を対訳した辞典ではない。江戸300年の蘭学、さらに洋学という外国語学習と研究の一大結晶であり、総決算であった。したがって、翻訳語のうえからは、先行の『和蘭字彙』に一つの範をあおいでいる。それゆえに同書にみられる翻訳語は英語のみでなく、全ヨーロッパ語に対する訳語というべき性格をもつ。本書で収集排列した訳語を<江戸時代翻訳日本語>と規定し、それをもって書名とし、『江戸時代翻訳日本語辞典』と呼んだのもここにいわれを秘す。また、<辞典>と名称を与えたことについて一言ふれておこう。一般的に辞典には語釈や用例が必要であることはいうまでもない。しかし、たとえば、<類語辞典>などのように、見出し語に対して、ただ同義語を列挙している形式のものもある。その他、<名数辞典・くずし字辞典>なども出版されている。そうした点で、本書が訳語を集めた語彙集ではあるが、巷間多く存在する、こうした通俗(広義)概念をもって、<辞典>と呼ぶことにした。本書は訳語を集め、それらを一定の基準方法によって排列した語彙集として、一般的国語辞典とは異なる特殊な辞典と了解していただければいいわけである。そしてあえていえば、ことばの奥、ことばの向こう側にある文化や社会・生活・思想を解釈する有効な辞典ということである。

いうまでもなく、翻訳日本語というのは多少の抵抗があろう。しかし、江戸時代の外国語とその翻訳態度や方法を検討するならば、本書の訳語は日本人が全智をかたむけ、頭脳の奥底から、しぼり出した新しいことばである。新時代・新思想・新文化をもるべく用意された新しいことばの革袋であった。訳語のうちにあるもの——たとえば理学(哲学)・舎密(化学)・版權・代言人・共和政治など——は明治末年まで受けつがれ、19世紀いっぱい、生きた訳語として文化や学芸を支え、進展させた原動力である。訳語には既存のことばでの置換もあり、どうしても対応しない意識(義訳)の場合もある。狭義の翻訳とか音訳語という分類もその意である。したがって、訳語の中でもっとも興味ある言い方は意識された創作の訳語である。もちろん総和としての翻訳語こそが文化を語り時代を描く。本書編集の方針もそこにある。

文化とは借用である。ことばは文化の一部である。訳語はその文化を解く大きな鍵である。多年、この訳語の考察と収集に腐心したもの、わたしの目ざす言語研究の一分野がここに存在すると考えるからである。本書をわたしにとって、翻訳語元年としたい。

本書は底本として文久2年(1862)、および慶応2年(1866)刊行の『英和对訳袖珍辞書』を用いた。<袖珍>とは原本の<Pocket>の訳語として出てきたものであるが、これは江戸時代のごく一般的な用語で、<袖=入ル>の意である。根源は明・清代の中国俗語からの借用と思われる。本書は訳語をすべてカードにとり、五十音順に独自の方法で排列編集したが、詳細は<解説>および<凡例>(大綱・細目)を参照されたい。あえて本書に辞典の語を接尾させたのも、そのゆえである。またその性格上、底

本とした英和対訳辞典を影印（原本の約4分の1）でおさめ、読者の利用に供した。

本書は日本語研究・教育にたずさわる人びとのみでなく、翻訳や外国語研究をはじめ、日本の歴史・文化さらに時代考証などに興味と関心をもつ人びとに無尽のことばの宇宙を提供すると思う。読書子の御理解ある御批判と御示教をお願いする。

1981年1月29日

編 著 者

凡 例

＜大綱＞

語彙検索上の注意と関連して、作成上の方法について概括的な説明をしておきたい。ということは、語彙の整理と排列の方法に直接かかわってくることである。細部については、改めて、＜細則＞をもうけて詳述する。これまで一般的に国語辞典や索引においては、ほとんどすべてが、語彙を五十音順・現代かなづかいによって整理分類し排列している。使い手の側に立って考えると、これは目ざす語彙をできるかぎりはやく見出すために、一つの有効な方法である。どういう意味であるか。また品詞は何かなどを考慮しなければ、目ざす語彙が見出せないとなると、前提条件としてそれなりの知識を必要とする。もし品詞別に語を排列するとすると、たとえば＜健康だ＞は現代文法からは、形容動詞、名詞＋助詞と、すくなくとも三か所を検索しなければならなくなる。これにさらに、＜すこやかだ＞とも読めるので、実際はもっと面倒である。それほど日本語自体がまだ整備されていない。あるいはまた品詞別からいくと、＜それ＞は代名詞の部に、＜その＞は連体詞の部にそれぞれ別々に配置される。したがって、品詞に分けて排列することは、おのずから語の意味や機能を示すことにはなるものの、反面では、その語が語源的・語構成のうえで、きわめて近いにもかかわらず、別の枠をはめられて、関連性が無視される危険がある。しかしまた、語形による五十音順の排列だと、もっとばらばらになる。たとえば、まったく関連のない＜愛＞と＜藍＞が隣りあったり、＜川＞と＜皮＞が隣りあうような、あまりにも非実質的で機械的な羅列になる。もっともわたしたちが日常用いる国語辞典は、この方式が主流である。しかし幸か不幸か、漢和辞典では、部首とか字形による分類方法——これ以外にはなかなかいい方法がない——が、そのまま字の意味や、音に体系的分類を与えて、好ましい排列となっている（ただし検索の良否は別である）。しかし語彙が一つの体系であるという時、日本語において、もうすこし多様で有機的な排列法があってもよからうと思う。たとえば、＜見る＞ということばの仲間、＜見た・見る・見えた・見える・見えない・見ない／見あきる・見出す＞など、一群の＜見る＞語彙がある。これを日本語の綴りによって、排列すれば、＜見あきる……見る＞まで五十音順に排列される。そのために、＜見あきる＞と＜見る＞の間に、別のさまざまな多くの語彙——たとえば、ミイラ（外来語）・ミカタ（味方）・ミナミ（南）など——がきちんと介在する。語や意味にまったく関係なく、ただ音（厳密には綴り）によって五十音順に排列するのであるから、むしろこれは当然のことで、＜見る＞語彙が一つの仲間として、まとまるはずがないのである。単なる索引の場合はこの方が有効で能率的かもしれない。しかし、本書の場合（以下、本書と略称）では、分類整理すべき語彙は翻訳語である点、また、翻訳語の性格づけをしたいという研究者の立場、さらに、表記の多様性など、やや特殊な性質をもつ語彙群であることから、思いきって語を意味分類の語彙集として独立した形態に近づける試みをしてみた。すなわち、五十音順という排列方式と、語の意味を考慮して同一語形・意味のグループ化によるまとまりをとった排列法を試みてみた。したがって、意味の分類と音の排列という二本立によった。そのため、求める語彙がたやすく機械的に見出せないことがあるかもしれない。その点を考慮して、各部（五十音順に分類したそれぞれ、＜ア＞、＜イ＞などの分類を＜部＞と呼ぶ）の冒頭に、その部で用いられている語相当の漢字の一部をその部内での排列グループ順に列挙して、俗にあたりがつけやすいように配慮した。これを＜漢字表＞と仮称する。ただし、漢字は同語異字（表記）であったり、異語同字（表記）、またいわゆるあて字などさまざまな使用があって、グループ化に異種のものを混入させ、さまたげとなりがちであった。したがって、原則として、漢字は一種の擬装と考えてこれを無視し、その擬装におおわれた肉の部分を考えることに専心した。たとえば＜荒・暴・嵐＞を一つにまとめたことなどである。また＜似せ物・偽物＞を同一語と断じたときである。したがって、原則的に訓読みを基調としたわけである。

語の分類とその方法はこうして、あくまでも＜語＞として読みとったもの（語形）を音のうえからと意味のうえから、同一意義（素）をもつ語によってグループ化したわけで、語形の変化も、変化を還元して同一語と認定してまとめたのである。これをもうすこし厳密に規定すると、同じ部内で、同一の＜語形素＞——上の＜見る＞を例にすると、すべてに共通する意味形態の最小単位＜ミ＞の部分、略称して、＜語素＞という——を考慮して

一つにまとめたということである。認定の是非はいうまでもなく編者にあるが、主観的に断定したのではなく、^フできる限り帰納的——手続き方法は省略する——におこなった(〈細則〉を参照)。さらに念をおしておけば〈悪・悪^{わる}・悪い〉は、同じ意味であろうが、3語とも語素に共通形態素をもたないから、それぞれ別々に排列される。もっとも人により〈悪・悪し〉に語素の〈ア〉を認める人もいるであろうし、是非の問題はある(ほかに音^{オト}と音などもある)。

つぎに、同じ〈イ(キ)〉の部で、〈井〉と〈位〉ではどちらを先に排列するかが一つの問題になる。現行のどの国語辞典も日本語としての基本原理による順序決定をもたない。もたないというよりも、わけへだてをしているのは、表記の漢字という別の便宜的要素によっている。もちろん、同音語は何か規準を設けねば順序がきめられないのであるから、それも一つの方法であろう。しかし本書は上述のように、擬装的な漢字表記はとらないのが原則であるから、別の方法を考えねばならなくなる。その点、やはり便宜上ではあるが、字音語は画数、字訓語はページの若いところに出てくる語、言いかえれば、若いページの語を優先することにした。前者の場合、本文を一見して判明するように、〈イ〉では、〈井・位・胃・意……〉のような順序に排列する。そして、それぞれが同じ仲間の語でグループ化されている。したがって、〈井〉の熟語の〈井戸^{イド}〉の方が、〈位〉の熟語の〈位階^イ〉より前に置かれている。

一般的に五十音順のみで排列する場合は、〈井戸〉は〈位階〉より後になるのが当然である。いわば、グループ化の核になる語(漢字ではない。念のため)を認知しないと、多少検索上でとまどいをもつことになる。その点も考慮して、上述のように〈イ〉の部であれば、その部に属する語の順序を示す意味からも、漢字(表記の一手間)を仲介して登録語彙の排列順を指示するようにした。すなわち、各グループの最初に配置される語(語形の一部)を列挙し〈漢字表〉を作成したわけである。結果として漢字で示されているまでで、あくまでグループ化の核になる語の要素(成分)すなわち、語素が具体的に語として独立した形をとる形態の一部を明示したことになる。便宜的かもしれないが、本書の構成から帰納的に考案した方法であり、漢字のもつ特色をも利用した方法であって、一つの方便として認容されると思う。したがって、本書の語彙の分類と排列は、できるかぎり語彙の内容と形式を一体のものに近づけるように工夫したもので、あらためて原則的な点をまとめると、つぎのようになる。

1. 訳語を五十音順に分ける……全体の構成は〈ア・イ(キ)・ウ……ワ〉と44の部に分ける。
2. 同じ部内であっても、訳語を五十音順に分けて排列する。……たとえば、〈ア〉の部では、〈嗚^フ〉がはじめで、〈塩^シ〉が最尾である。
3. 同じ部内の同じ声の語は字訓語を字音語より優先させる。さらに同じ部内の同音語は、すくない画数順に、同訓語はページ数の若いものから順次排列する。
4. 同じ部内では、同じ語素をもつ語彙は一つのグループにまとめ、その中では、五十音順に排列する。俗に同じ意味・形態の語は一つにグループ化するということである。
5. 五十音順に排列の場合、現代かなづかいによる。したがってヤ行の〈イ・エ〉、ワ行の〈キ・エ〉は、いずれもア行の〈イ・エ〉に統合した。また〈ヂ・ヅ〉は〈ジ・ズ〉に統合した。
6. 〈……〉で受ける訳語は、それぞれの部の最後においた。たとえば、〈……スル為ニ〉(in/in order to.) は〈ス〉の部の五十音順排列が終った末尾に配置する。
7. 〈底本〉であきらかに欠刻・誤字(誤訳ではない)と思われる場合は、これを補訂して採択した。その点、解説末尾に〈訳語改正一覧表〉として、〈底本〉と訂正の訳語とを対照した一覧表を付して明示した。ただし、底本の〈品詞〉表示は誤刻の場合をのぞき正・誤を考慮せず、〈底本〉のまま、翻訳して略記しておいた。
8. 各部の冒頭にあげた〈漢字表〉には、2種類の漢字体を用いた。これは本文中の用法に応じて区別したものである。また同時に符号によっても用法の区別を示した。なお各漢字に与えたルビは、音訓に関係なく各語のはじめの2音節までを便宜的に与えた。
9. 採択した訳語の範囲についていえば、見出し英語に対訳されているすべての訳語にわたる。したがって、

見出し英語の1単語に対して、2単語以上の訳語が与えられている場合は、それらも別々にぬき出し、全体の訳語数を数字で示した。各訳語はまったく対等な扱いで排列した。註文も訳語と同じ扱いをした。

<細則>

1. 本書は『英和对訳袖珍辞書』の<初版本>（以下<底本>という）・<再版第1刷本>の訳語を、語構成を配慮して、五十音順に排列したものである。なお、原則として表記上の問題——片仮名・漢字・漢字片仮名まじりなど——は一切考慮せず、語として読みとりのうえで排列した。
2. 和語・漢語、また同訓・同音語の場合、該当語の初出ページと漢字の画数によって排列を定めた。
3. 註文の扱い；

(a) <底本>には訳語についてさらに細字双行による註文がある。これは（ ）で註文部分をくくって区別し3種の扱いをした。すなわち第1種は排列にあたり、訳語一般と同じく扱った。ただし第2種は<底本>どおりの体裁で訳語につづけて註文をおいた。第3種は訳文中の特定な語に付された註文を、そのみとり出して排列した。註文と訳語とは当然レベルが異なるが、註文にも種々の性質があり、同じ扱いがしにくいものがある。また検索者の便を考え、かつ註文をとおして語を理解する便をもつと判定したからである。

(b) 上の(a)第1種、第3種の排列の場合は、品詞および訳語数の表示は省略した。

4. 訳語の<未詳>、<○○ノ語>（たとえば、<文学ノ語>など）は、それ自体訳語ではないので、一括して本文の末尾においた。原語と照合して、どのような語が訳出できなかったか、またどのような専門用語が特にとり上げられているか、多少は参考になるであろう。
5. 記載の方式；

(a) 形式的にも<底本>の訳語のそれをくずすことなく記載した。品詞名・用字（表記）など<底本>どおりである。ただし品詞名は別掲のように略称にしたがった。また<底本>で2単語以上の訳語の与えられている場合は、全訳語数を分母とし、第1番目・第2番目と訳出の順位を分子で示した。これは品詞名の後に示して、<底本>での英語と訳語との対応を示した。いうまでもなく、見出し語には<底本>のページ数と左・右両側の区別、行数を明示して、検索しやすいよう配慮をした。つぎに実例をあげてみる。

<見出し語>・<品詞名>・<順番／訳語数>・<ページ>・<左右の別>・<行数>

愛スル [他] ¼ 459 ヒー 9

* <底本>での左・右両側の表示は、それぞれ<ヒ(左)・ミ(右)>のように示した。

- (b) <底本>において、まったく同一の語形・表記・品詞の場合は、一つにまとめて所在個所を示した。たとえばつぎのとおりである。

愛スル [他]	⅔・189ヒ-17	} → 愛スル [他] ⅔・189ヒ-17 ⅓・306ヒ-9 ⅓・385ヒ-15 ¼・459ヒ-9 ½・469ヒ-7
愛スル [他]	⅓・306ヒ-9	
愛スル [他]	⅓・385ヒ-15	
愛スル [他]	¼・459ヒ-9	
愛スル [他]	½・469ヒ-7	
+愛スル人 [実]	⅔・324ヒ-18	} → +愛スル人 [実] ⅔・324ヒ-18 ¼・766ヒ-15
+愛スル人 [実]	¼・766ヒ-15	

* <愛スベキ>と<愛ス可キ>など表記・語形など、一箇所でも相違している場合、また品詞が異なる場合などは、それらを別々に表示してまとめたかった。

- (c) <底本>と<再版第1刷本>とで訳語の出入りがあり、後者のそれも重要なものと判断して、<+>の符号を見出し語の頭に付して採択した。また<再版第1刷本>でのぞかれた<底本>の訳語は、<->の符号を同じく見出し語の頭に付して区別した。つぎに実例をあげておく。

○ <再版第1刷本>から採択の訳語；

+愛情 [実] ¼・299ミ-15

○ <再版第1刷本>でのぞかれた<底本>の訳語；

-愛 [実] ⅔・206ヒ-13

- (d) <全> (同上) と表示された訳語の場合で、<底本>の品詞名と、それにとまなう訳語の語形とが正格にあわぬ場合は、私意で語尾変化させ、正しいと思われる語形を与えた。つぎに実例をあげておく。
- 〔実〕 <美シ>ノヲ→<美シイ>ヲ
- *なお、<全> (同上) と表記された訳語は、内容表記のいかんにかかわらず、訳語数としては1個と算定した。
6. <漢字表>・本文の符合はつぎのように用いた。
- (a) <漢字表>;
- 〔 〕: 対応する現代当用漢字(字形・用法)を与えた。
- () : 同じグループのことばで他に使用の漢字すなわち、同語異字を示した。ただし本文中の排列の順に抽出した。*なおくあて字>と思われるものは教科書体で区別した。
- (b) 本文;
- 〔 〕(大): 品詞名。〔 〕(小): <底本>で、訳語に付された読みがな。
- + : <再版第1刷本>の訳語 - : <再版第1刷本>で削除の訳語。
- < > : 底本で<全>(同上)とある場合。
- ヒ/ミ : ヒは左側、ミは右側。ただし、<影印>部では、左・右は、上・下の体裁になる。
- /□ (分数表示) : 分母は見出し語(英語)に対応の訳語数、分子は列挙されている訳語の順番を示す。
- : その方を見よの意。
7. 見出し語の排列; 排列は現代かなづかいによる五十音順と語構成との2本立によった。ただしつぎのように配慮した。
- (a) 同一グループと判定できる語は、一つにまとめ、その範囲内で五十音順に排列した。ただし、<再版第1刷本>の訳語は、<底本>の訳語の後に配置した。
- (b) それぞれの訳語の表記・用字は現代と異なって統一がとれていない。したがって、同語異字と異字同語という点は無視して個々の語を考慮して、ことば、具体的には<かなづかい>によって語形をよみとり排列した。<アケル>が<開・明>などと表記されている場合、同じ語とした。また<アナ>が<穴・孔・坑・窖>の4種、<イヤシイ>が、<賤・卑・鄙>の3種の漢字で表記されていても、語としての相違は認めず、同一グループにまとめた。
8. 訳語の分類; 直接、排列や検索にかかわってくるので、語の分類について若干コメントを加えておく。訳語は原則として、同じ語構成のものを一つにまとめたが、同じと判定した基準は常識的であるが、対応の英語、『大言海』をふくめて、わたしの周辺にある国語辞典を参照した。コメントの要点は3点ある。
- (a) 同じ語構成というのは、あくまでも語形態と意味とが一体の場合である。<悪>と<あし>は一見して、形態・意味が同一と考えられそうであるが、漢語と和語という点、これを区別した。『新明解国語辞典』では、<あ・し(悪し)>は<「悪い」の雅語形>とあり、『大言海』では、<あく(悪)>は<アシキ事・ワロキ事>とある。たまたま、アクとアシで語素に共通のもの、俗に音が似ているが、これは別体系の言語の偶然的類似にすぎぬことになる。<吹く>と<噴^{フン}>、<おと(音)>と<音^{オン}>なども同様であろう。もっともさらに考究の結果、両語に本質的な一致が得られるかもしれないが、現段階で別語と認定されているものは、漢字などをあくまで擬装ととらえて、別語としてあつかった。
- (b) 語群の排列; 現代かなづかいによる五十音順であるが、それぞれの語群の排列上で、先頭に配置される語はどう選んだかが問題となる。これについては、<大綱>でもふれたように、まず<ア>の部ならば、<ア>の音を語頭にもつ語を五十音順に排列し、つぎに各語群に分類した語群のはじめにおかれる語を比較して、若いページにある語を先頭とする語群を先に配置した。そのため上でふれたが簡単な<語群配置>の小目次に相当する漢字による一覧表、すなわち<漢字表>を各部のはじめに明示した。したがって、各自、それを一つの目安として、検索してほしい。ただしこれは必ず漢字表記をとまなっている語に限るので、片仮名表記だけの語については排除されている。その点、考慮されたい。

- (c) 語群化にあたり、接頭語・漢語など、特に考慮しなかった。たとえば＜相手＞と＜相会ウ＞などでは、＜相＞に異なりがあり、区別すべきであろうが、語としての意識からはむしろ同じ語群としてまとめた方が有効だと判断した。また＜平易＞と＜平和＞の＜平＞なども同語群とすることは、ややためらわれるが、同様の理由で、一つにまとめた。訳語全体を見とおして、漢語にあっては、同音・同字形は同語という仮定でグループ化してある。
9. 訳語の読み；どのような排列法をとるにせよ、語彙の正確な読みが基本である。この点、原本に片仮名で読みがなのある場合をのぞき、多くの漢字表記による訳語の読みにはきわめて困難を感じたが、つぎの方針をとった。
- (a) 本書の後刷り本とも称すべきいわゆる『薩摩辞書』の読みを参照し採択した。これは時代的な点、ほとんどの訳語に読みがながふられている点からである。ただし＜踝＞を＜スアシ＞と読んでいるような場合、それによらず＜クルブシ＞と読んだ。問題になる場合は、＜底本＞の英語、漢字なども考慮して、できるかぎり正確を期した。
- (b) 当時の他の文献資料の読みに照らして、私意をもって判読した。したがって、＜不定＞などの場合、＜フテイ・フジョウ＞のいずれで読むべきか。また＜襦衣＞を＜シタギ・ハダギ・ウワギ＞のいずれで読むべきか断定しがたい訳語もあるが、編者によって判定したので、了承されたい。
- 以上の方法によったが、読みにはなお多くの問題がある。＜走＞を＜ワシル＞と読むのもその一端であるが、これら当時の語であるから、現代からみて既に消滅の語もあり、検索の際、1度ならず検索の労をとるよう切望する。
10. 漢字字体は原則として現代当用漢字字体に統一した。ただし慣用的なものや現代当用漢字に見えないものは、編者で配慮した。異体字など現行のものと異なるものについては、それらを抜きだして資料編に正楷ないし現行字体と対照して一覧表にまとめた。
11. 訳語の与えられていない場合は、それぞれ＜草の名＞などで登録排列しておいたので、該当のページを影印によって確かめ、対応の英語を確認して現代日本語との対応を見出して、各自考察してほしい。
12. ＜未詳・文学ノ語＞などは、索引の末尾に、一括してまとめて登録しておいた。いずれも訳語ではないので、別扱いとしたものである。
13. 念のため、＜底本＞中の符号をぬき出しておく。
- (a) —, =, 「 」: 原則として、外来語（現代は片仮名表記のもの）に用いている。
- (b) ……: 語句の省略を示す。
14. ＜底本＞として用いた影印は、若林正治氏御所蔵の＜初版本＞によった。ただし、虫くい、その他判読不明の部分は、惣郷正明氏御所蔵の＜初版本＞を使用させていただいた。

略称表記一覧

〔形〕	形容辞 (adjective)
〔副〕	副辞 (adverb)
〔冠〕	冠辞 (article)
〔接〕	接続辞 (conjunction)
〔間〕	間投辞 (interjection)
〔不規〕	不規則 (irregular)
〔分〕	分辞 (participle)
〔複〕	複数 (plural)
〔前〕	前置辞 (preposition)
〔過〕	過去 (preterit)
〔代〕	代名辞 (pronoun)
〔規〕	規則 (regular)
〔実〕	実名辞 (substantive)
〔他〕	他動辞 (verb active)
〔自〕	自動辞 (verb neuter)
〔略〕	省略 (abbrev. for)
〔現〕	現在 (pres. of)
〔過分〕	過去分詞 $\left(\begin{array}{l} \text{part. past of} \\ \text{part. pass. of} \end{array} \right)$
〔三〕	三人称 (third person of)
〔単〕	単数 (sing. of)
〔二〕	二人称 (second pers. of)
〔非〕	非人称動詞 (verb impers)
〔助動〕	助動詞 (verb aux.)
〔動〕	動詞 (verb)
〔欠〕	欠如動詞 (verb defect)
①	イデオム (慣用句) 当該の見出し語を含む慣用句。
㊦	センテンス (文) 当該の見出し語を含む慣用文。

『江戸時代翻訳日本語辞典』

目 次

口 絵

序

翻訳日本語 1

凡例……Ⅰ ア…… 1 カ……109 サ……243 タ……359
ナ…… 445 ハ……481 マ……575 ヤ……623 ラ……653
ワ…… 669 未詳…679

解 説 681

Ⅰ 江戸時代の英学小史(681) Ⅱ 版種と書誌(698) Ⅲ 訳語
とその考察(734) Ⅳ 堀達之助小伝(766) Ⅴ 原本・底本に
関する若干の書誌的問題点(784)

『英和对訳袖珍辞書』(影印) 833

あとがき

EPITOME